氏　　名	花田　梢
学位の種類	博士（医学）
学位記番号	乙第３１２号
学位授与年月日	平成２７年１２月２日
審査委員	主査　教授　　関根　浄治
	副査　教授　　紫藤　　治
	副査　教授　　津本　周作

論文審査の結果の要旨

食道噴門腺は食道下端の粘膜固有層内に存在し、内視鏡検査時にしばしば食道粘膜表面に露出する黄白色の隆起として観察されるが、その役割は未だ不明である。そこで、本研究は食道噴門腺と胃食道逆流症（Gastroesophageal Reflux Disease: GERD）の関係性を明らかにする目的で企画した。

対象は、本研究に同意が得られた上部消化管内視鏡を施行した2,656例（全例人間ドック）で、年齢、性、BMI、喫煙・飲酒の有無、GERDの有無と症状、胃粘膜萎縮の程度、胃内反転観察法による食道裂孔開大の程度と食道噴門腺の存在位置および程度について検討し、結果は多重ロジスティック解析を行った。食道噴門腺は、全症例の13.4%に観察され、女性に有意に多かった。食道噴門腺の存在とGERD症状の有無については明らかな関連性を認めなかったが、食道噴門腺を有する例では有意に逆流性食道炎が少なかった（2.5%vs.11.4%）。また、食道噴門腺の局在については、その主座は左後壁側であった。これは従来報告されている軽症逆流性食道炎の局在の主座である右前壁側の反対側であり、食道噴門腺の存在が軽症逆流性食道炎患者の食道粘膜傷害の方向性に影響している可能性が考えられた。

以上のことから、食道噴門腺が粘膜傷害発症に対して抑制的に働いていることが明らかとなった。今後、食道噴門腺の存在と食道下端の酸の停滞の周在性についての検討など、軽症逆流性食道炎の粘膜傷害発症のメカニズムとの関連については、さらなる検討が必要である。